

市長記者会見記録

日時：2018年 3月 9日（金）14時04分～15時05分

場所：第3庁舎18階 講堂

議題：三菱ふそうトラック・バス株式会社と川崎市との包括的な連携・協力に関する協定の締結について（市民文化局）

<内容>

《三菱ふそうトラック・バス株式会社と川崎市との包括的な連携・協力に関する協定の締結について》

司会： それでは、ただいまより市長記者会見を始めます。本日の議題は、三菱ふそうトラック・バス株式会社と川崎市との包括的な連携・協力に関する協定の締結についてとなっております。

それでは、本日の議題について、三菱ふそうトラック・バス株式会社からお越しいただきました皆様をご紹介します。

マーク・リストセーヤ代表取締役社長でございます。

松永和夫代表取締役会長でございます。

スヴェン・グレーブレ副社長、生産本部長でございます。

ウォルフガング・グララーザー人事本部長でございます。

それでは、福田市長より今回の協定締結についてご説明をさせていただきます。市長、よろしく願いいたします。

市長： はい。それでは本日、三菱ふそうトラック・バス株式会社との包括的な連携・協力に関する協定の締結に至りまして、皆さんにご報告させていただきます。また、リストセーヤ社長、松永会長をはじめ、三菱ふそうトラック・バス株式会社の皆様におかれましては、お忙しい中、市役所までお越しいただきまして、まことにありがとうございます。

協定の内容について、私から発表させていただきます。三菱ふそうトラック・バス株式会社は世界最大の商用車メーカーであるダイムラーグループの一員であり、本市のものづくりの中核を担う企業として、本市の成長とともに歩んでこられました。また、三菱ふそうトラック・バス株式会社はEVトラックの量産化を世界に先がけスタートさせるなど、地球環境保全を社の最重要課題の1つとして捉え、最新技術により環境への負荷低減に継続的に取り組んでいる企業でございます。

一方、本市につきましてはご存じのとおり多くの環境技術産業が集積し、公害を克服してきた歴史を持つ環境先進都市でございます。こうしたお互いの持つ強みを生かして、地球環境保全などのグローバルな課題の解決に向けたイノベーションを推進するとともに、本市に拠点を構える地域企業の一員として、安全・安心のまちづくりなど、身近なローカル課題の解決や地域の活性化に向けても連携を深めていくため、このたび協定の締結を行うことといたしました。

協定に基づく連携・協力の取り組みの内容につきましては、次の4つの柱となっておりますが、主な取り組み内容についてご紹介をさせていただきます。

1つ目といたしましては、省エネルギー化、地球温暖化対策に向けたイノベーションの推進に関するでございます。三菱ふそうトラック・バス株式会社は既に商用化に成功したEVトラックをベースとしたごみ収集車の開発を進めております。環境負荷の小さいEVごみ収集車の実際の活用に向けて、川崎市をフィールドとした実証実験を共同で実施をいたします。また、新たな技術によるイノベーション推進を共同で進め、省エネルギー化、地球温暖化対策など、環境配慮型社会の構築に向けた取り組みを進めてまいります。

2つ目といたしましては、安全・安心のまちづくりに関するでございます。幸区と中原区にまたがる川崎製作所や、本年1月に新たにオープンしたFUSOグリーンガーデンなど、災害時における一時避難場所としての活用や、その他、三菱ふそうトラック・バス株式会社が所有する資源の利用など、災害時連携のあり方の検討を進め、協力体制を構築してまいりたいと考えております。

3つ目といたしましては、ものづくり技術の活用による産業振興、国際化推進に関するでございます。グローバル企業であり、地域のものづくりを代表する製造事業者である三菱ふそうトラック・バス株式会社の資源を活用して、海外視察などの受け入れや産業観光政策での協力などを進めてまいります。

4つ目といたしましては、地域との連携・子供たちを地域で支える環境づくりに関することとして、環境配慮技術やものづくり技術などに関する工場見学などを通じた子供たちへの教育活動の支援や、高校生などのインターンシップの受け入れ、また地域の賑わいづくりや美化活動など、地域と連携した取り組みを進めてまいります。

主な取り組みとしては以上になります。本協定をきっかけとして、両者の関係性をさらに深め、さまざまな社会課題に対応した取り組みを進めてまいりたいと考えております。

私からは以上です。

司会： 続きまして、三菱ふそうトラック・バス株式会社、マーク・リストセーヤ代表取締役社長よりご挨拶をお願いいたします。

リストセーヤ代表取締役社長： 福田市長をはじめ、そして市役所の皆様、そしてメディアの皆様、本日はこのような特別な会へお越しくださいます。心より感謝申し上げます。

世の中には必ず初めてのものがあると思いますが、昨年、三菱ふそうは環境配慮型の社会構築に向けて初めて実現したことがございます。それが世界で初めての電気小型トラックの量産開始です。また、日本の電気トラックの急速充電設備を開発いたしました。

そして今回、また一つ新しい事例が発生しております。弊社の歴史の中で初めて、将来の環境に関して同じビジョンを共有できる自治体と包括的な連携・協力に関する協定を締結することになりました。それが川崎市です。

1つ、川崎市と弊社三菱ふそうには共通点がございます。それは、環境に優しい社会をつくっていかうということです。この目標を目指して、私たちはまず、この川崎でスタートすることを決意いたしております。なぜかといいますと、三菱ふそうが操業を始めたのは、この川崎。ルーツを川崎に持っているので、まずここからスタートすることが極めて自然であろうと思います。弊社が創業してから85年が経過いたしました。川崎はこれまでも、そしてこれからも、常に私たちのホーム・グラウンドであり続けます。172カ国に商品を出しておりますが、買っていただくお客様から、「ふそうはどこの商品か」と聞かれます。そのとき、この川崎からだということをこれからも伝えていきます。

これから、私どもは川崎市と協力してこの体制を強めていきたいと思っております。これは排ガスゼロの電気トラック、ただ、これは排ガスだけではございません、騒音が全く出ない電気トラックというものを提供してまいります。そしてこのトラックは最先端の技術でつながっている、つまり、コネクテッド・トラックとなります。これから、この川崎の中で、世界で初めての電気トラックというものをつくっていかうと思っております。

この協力体制をもちまして、私たちはさらに川崎市と取り組んでいきたいと思っております。福田市長、たくさんの私たちの社員の夢を叶えてくださいます。どうもありがとうございます。川崎市と一緒に、さらに次なるステップに進んでいかうと思っております。

どうもありがとうございます。

司会： ありがとうございます。

協定書につきましては、既に記名・押印を済ませておりますので、ここで写真撮影とさせていただきます。

前のほうへどうぞ。それでは撮影のほう、よろしくお願いいたします。

(写真撮影)

司会： ありがとうございます。

それでは、ただいまの議題に関する質疑応答に移りますが、この会見の終了後、会見室において記者レクを行わせていただき、改めて皆様からのご質問をお受けしたいと存じますので、あわせてよろしくお願いいたします。

なお、市政一般の質疑につきましては本件についての質疑が終了後、改めてお受けいたします。

それでは、進行につきましては幹事社様、よろしくお願いいたします。

幹事社： 幹事社です。よろしくお願いいたします。

今回の締結で、端的に言って川崎市側から見て最も具体的に期待できること、それから三菱ふそうトラック・バスから見て今回の提携で最もメリットに思うことを教えていただきたいんですけども。

市長： まず、三菱ふそうトラック・バスさんは、世界最大の商用車をつくっているダイムラーグループの一員であって、リストセーヤ社長からお話があったように、まさに川崎発祥の会社が、環境技術を磨かれて、そしてEVでゴミ収集をすると。これは川崎で製造のeキャンターにいわゆる収集のボックスを載せてという形で、川崎モードの車が世界最先端の環境技術というものをまさに川崎の地で実証していくということで、ものすごく意義のあることだというふうに思っています。

先ほど社長からお話があったように、お互い、環境に優しい社会をつくるという共通目標を持っているところですので、そういったところで具体的な取り組みができるというのは非常にありがたいことだと思っています。

リストセーヤ代表取締役社長： ダイムラー・トラック・アジア、三菱ふそうを代表いたしましてお話しいたします。まず最初に、これはコミットメント、私たちの誓いです。多くの市町村がこういう話をしておりますけれども、今ここで私たちは実際に、話をするだけでなく、実現しております。この協力体制というのは、実際のユースケースになっていくと思います。このユースケースのアクションで自信を持っていきます。そして、これが信念をつくっていくわけです。この信念を、皆さんが真似していくことになるでしょう。川崎市との協力体制、これは実現しております。これはもう

空虚な言葉ではありません、世界にその結果が出てくるでしょう。ここで社会のためにできると。これが、この協力体制のいいところだと思います。

幹事社： 社長にお伺いしたいと思います。

実験をするということは、何らかの課題もまだ抱えているのかと想像しております。e キャンターの現状で抱える課題、もしくは改良点は何かと考えていらっしゃいますか。

リストセーヤ代表取締役社長： まずバッテリーの問題ですけれども、こちらのバッテリーパッケージですね。セル自体がほんとうに将来を決めていると思っています。今、こちらはパナソニック製があるんですが、中国や韓国のメーカーというのも出てきております。ただ、ここは日本のメーカーと一緒にやっていることが重要だと私たちは思っております。

そして、2 番目です。昨日、トヨタからディーゼルに対するコメントがありましたけれども、これについて私はちょっと横やりを入れられたという気持ちでおりまして、私たちは自分たちの信念で向かっていきたいと思っております。

3 つ目、技術には大きな問題はありません。そして、これに騒音はないのですが、これは川崎市ならではのトーン、メロディーですか、そういったものをつくっていただけたらと思います。EVトラックにつきましては、私たちも12年取り組んでいますので、大きな問題というのはそれほどございません。ただ、大型の電気自動車につきましては、タイヤを考えていく必要があります。また、冷却のほうにも問題がありますので、e キャンター自体には問題ありませんが、大型についてはこれからまだ検討が必要かと思われます。

幹事社： すみません、今の「川崎ならではのメロディー」というのは、具体的には何なんでしょうか。ごみ収集車の「好きです かわさき 愛の街」の歌をかぶせるという意味なんでしょうか。

市長： おそらく、社長のおっしゃっている趣旨は、全くノイズがないので、これはEVの特徴だと思うんですけれども、そのままやると存在感がなくなるので、そういう意味で何らかのメロディーなりトーンというものをとおっしゃったと思うんですが、そういう意味では、今、川崎で流れているメロディーがよりクリアに聞こえるのではないかなと思います。ノイズなしで。

幹事社： 理解できました。ありがとうございます。

幹事社： ごみ収集車の実証実験ですけれども、当初は何台ぐらいで、何月ごろからというようなディテールはわかりますでしょうか。わからなければ、後で個別に。

市長： では、ちょっと事務方からお答えさせていただいてよろしいでしょうか。

環境局廃棄物政策担当課長： 環境局の廃棄物政策担当課長の石原と申します。よろしくお願いたします。

今後の実証実験の目安ですけれども、まずは1台、平成31年春をめどに実験開始できたらといったところで、今、三菱ふそうさんと協議しているところでございます。

以上でございます。

幹事社： ごみ収集車のeキャンターは、これからつくっていくということになるのでしょうか。

リストセーヤ代表取締役社長： はい、そうです。これからつくっていきますけれども、ごみ収集車の収集部分は架装になります。こちらの架装部分は電動になりますので、パワーテイクオフということで、これが現在開発中でございます。そして、このトラックはコネクテッド、つまりつながっておりますので、このトラックがどこにいるのか、どんなルートを走行しているのか、そして、例えば荷物をどれぐらい積んでいるのか、どれぐらい容量が余っているのかということもわかるようになります。トラックがつながっているというのがどういうことを意味するかというと、毎日、日によって、天候などにもよって、どのルートを通って、どのおうちを通って、また、どの荷物を運んでという、そういうルートの決定にも役に立つようになってきます。そして、具体的にこういった検証をしていることになっていきます。そして、EVトラックというだけではなくて、その次の取り組みとして、部分的に自動運転のトラックということも考えております。

幹事社： ありがとうございます。

では各社、質問ありましたら、お願いします。

記者： 幾つかお伺いします。

今回の事業を川崎で行うに当たって、国からの補助とか、何かそういう助成事業の対象となっているのでしょうか。なっているのであれば、それはどういう事業で、どれぐらいの補助が出ているのかをまずお聞かせください。

市長： 事務方からでもいいですか。

環境局廃棄物政策担当課長： 今現在は、これから本格的に開発に向けた協議をしていくといったようなところでございまして、国からの補助等については、これからま

たどんなものが適用できるか検討事項になってくるかと思いますが、そこは三菱ふそうさんとあわせて検討してまいりたいと思っております。

以上でございます。

記者： 受ける予定がないのではなく、これから受けることを前提に検討をされる。

環境局廃棄物政策担当課長： そうですね。まだ補助の面でとか、そういったところもまだ全然把握ができておりませんので、そこも含めてこれからという形になります。

記者： 補助が出ない場合でも、単独でも進めるという意味でいいのでしょうか。

環境局廃棄物政策担当課長： そうですね。三菱ふそうさんとは、そういうお話で今進めているところでございます。

記者： はい。あと、これは社長にお伺いしたいと思っております。先ほどトヨタの話で Destructive という単語があったかと思っておりますけれども、これはヨーロッパ市場からのディーゼル車の撤退のことをおっしゃっているのでしょうか。そうでなければ、何をもってトヨタのことでそういうショックを受けたとおっしゃっているのか、ちょっと具体的に教えていただけますか。

リストセーヤ代表取締役社長： そうですね、明確なコメントがあったと思っておりますが、トヨタは2018年にディーゼルから撤退するということについてのコメントになります。そして、いろいろな変化というものがありますけれども、私どもはこのスピードを緩めることなく進めていきたいと思っております。将来は電気だと思っておりますし、この川崎をユースケースにする、実際にそれを形あるものにしていくということです。実際に皆さんが思われているよりも、このスピードは早いレベルで進んでおります。

記者： あと、平成31年春にまず1台導入するということでしたが、これは具体的なエリアが決まっているのでしょうか。

あと、充電設備なんですけれども、これはどこに設置する予定なのでしょうか。

環境局廃棄物政策担当課長： まだ、どこで実証試験を行っていくかにつきましても、これからご相談と協議をしていく状況でございます。まだ自動車の開発のほうもございいますので、約1年先ですか、この間に十分詰めて、どこが一番試験にふさわしいかといったところで検討してまいりたいと考えてございます。

以上でございます。

記者： では、最後にもう1点、社長にお伺いします。

電池に関しては大丈夫だというようなお話でしたけれども、これは電気メーカーの仕事かもしれませんが、大型車に積むということで、結構、電池というのは小さくしなければいけないと思うんですが、その辺の技術開発のめどというのはもう十分たっ

ていて、平成31年の春にはもう試験車が絶対できるという、そういう見通しは立っているのでしょうか。

リストセーヤ代表取締役社長： はい、こちらの1台についてはそうであります。例えば、2,000マイルも全て1マイル、1つのステップから始まるということで、これは単なる1つのステップにしか過ぎません。そして昨年も、そして、これから25台、セブンイレブンとヤマトさんに納入いたしますし、また続いてドイチェ・ポスト、またはアクサなど、いろんなドイツの企業にも納入してまいります。そして来週は20台、さらにロンドンでも引き渡しなどがございますので、また川崎でもこの1台だけではなく、もっと増やしていくということを考えております。

テストというものは単なるテストにすぎませんが、これからもっとたくさん来るものの前兆であると理解していただければいいと思います。もっと多くの市町村が川崎に倣ってオーダーいただけたらと思います。

記者： ありがとうございます。

記者： 市長、2年前に、川崎区のごみ焼却場で発電した電力を使ってJFEエンジニアリングが開発したシステムで実際に収集するという実証実験をされて、今年度、実際に走らせようということで進んでいると思うんですけども、基本的には三菱ふそうさんとされる実証実験もその焼却場から生まれる電力を使ってやるものなのかどうか、1点まず教えてください。

市長： いいえ、JFEさんのものは、確かにご指摘のとおり焼却場からできた電力でということでもありますけれども、今回の実証実験はそれに限った話ではございません。

記者： 特に期待しているシステムというか、川崎の環境提言につながるという、EVということ自体で貢献はしていると思うんですけども、特にこの三菱ふそうさんの実証実験でごみ収集業務全体を含めて何か期待しているものと言いましょうか、期待している実験の部分、実証、こういうものを実証実験で試みたいというようなものはあったりするんですか。

市長： いや、ちょっとこの協定では、まだ、そこまで具体化しているかわかりませんが、昨年、三菱ふそうさんの会社のところに急速充電器を設置していただいて、特にこういうものは商用車に非常に有効な手段であるということをもっとパイロット的に取り組んでいただいております。こういうふうな環境が次々と生み出されていけば、EVごみ収集車だけではなくて物流にも革命が起きるのではないかなと思っ

ております。そういった大きな取り組みに対して、ごみ収集という1つの手段がまず動き出すと。ですから、今、リストセーヤ社長が言ったように、EVというのはもっともっと急速に広がると思います。その第一歩がこれから始まっていくんだということだと理解していただければと思います。

記者： わかりました。

幹事社： ほか、いかがでしょうか。

今日は自動車新聞さんも参加されていますが、自動車新聞さんから何かご質問があれば。せっかくの機会ですから、いかがでしょうか。

司会： よろしいでしょうか。

それでは、本件につきましてはこれで終了といたします。ここで関係者の皆様方が退室されます。

ありがとうございました。

なお、質疑一般に向けまして場面転換をいたしますので、少しお待ちいただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

(市政一般)

《ホテルシップについて》

司会： 大変お待たせいたしました。それでは、市政一般についての質疑に移らせていただきます。

進行につきましては、改めまして幹事社様、よろしくお願いいたします。

幹事社： では、幹事社から質問ですけれども、今週月曜日、政府の関係省庁会議で2020オリンピック・パラリンピックのホテルシップ構想の概要について川崎市の東扇島が挙がりました。5つのうちの1つが川崎ということで、これについてのご感想を教えてください。

市長： あれはですね、若干、報道されている内容と違うのかなということなんです。5つの港が1つの候補地になり得るところという形で、私どもとしてもオブザーバー参加させていただいているので、そういったところなんですけれども、これからもまだクリアしていかななくてはいけない課題というのがたくさんあるので、そうしたものに応えられるような取り組みというのは引き続き必要になっていくのかなと。ですから、情報収集を含め、しっかりやっていきたいなというふうには思っております。

幹事社： すみません、いわゆるオリンピック・パラリンピック会場に最も近いといましようか、江東区のバースを除けばオリンピック・パラリンピック会場に最も近

いと言える地の利というものがあるかと思うんですけれども、今、具体的に、昨年来いろいろとホテルシップ構想を川崎市として取り組んでこられた中で、具体的に何か動きというものはあるんでしょうか。海運会社であるとか、客船会社であるとか、そういうところの。

市長： 私どもの担当も、いわゆる旅行代理店だとか船会社だとかといったところにヒアリングなどをさせていただいている状況でございますので、時間的には2020年が迫ってきておりますが、まだそれぞれに課題があるかなとは思っていて、私どもは旅客のバースというものではないものですから、そういった意味でちょっと通常とは違う部分と。傾向として、だんだん船も大きくなっていきますので、それに耐え得るためにはいろいろ課題はあるので、そういったことを、まあ、何といたっても決めるのは船会社の人だとか旅行代理店だとかということになるので、それに見合うだけのものがどうできるのかとか、そういったところを情報共有、情報収集をみんなですていくという段階かなとは思っております。

幹事社： 水深が14メートルということで、5万トンから10万トンクラス。旅客対応にすると大変な、横浜の大さん橋を超えるぐらいの船が停まれるだけの潜在能力を持っている場所と見ております。横浜の大さん橋、今回は大さん橋が対象ではなかったんですけれども、ベイブリッジの高さがあるため巨大客船が入れないというボトルネックになっている。そういった意味では川崎港の旅客対応というのは、市長の視野には入っているんでしょうか。

市長： それぐらい大きいものを停めるということになると、相当な設備投資も必要になってくると思います。かつ、旅客ではなくて、やはり物流のいわゆるメーンのところをあまり邪魔してはいけないという、そういう課題もありますので、今はちょっと、なかなか詳細には申し上げづらい部分があるんですが、いろいろな、クリアしなくてはいけない課題というものがあるので、そのことを一つ一つ、私どもも研究していかななくてはいけないかなとは思っています。

幹事社： ありがとうございます。

幹事社： 幹事社です。よろしく申し上げます。

今のホテルシップの件で二、三、申し上げにくいところがあるとおっしゃっていましたが、クリアしなくてはいけない課題は、やはり通常の物流をとめてはいけないということや、あとはやっぱりC I Q、税関等々の問題も抱えているという、そういう認識でよろしいんでしょうか。

市長： 今回の議会でも答弁させていただいたとおり、旅館業法の話だとか、いろんな法律が絡まっているんですね。そこも協議会の中でこれからもいろいろやっていかなくてはいけないテーマだと思うんですけども、それ以外にも川崎は、現状と求められるところに若干の差があると思いますし、物流というメーンのところにも大きな影響を及ぼしてはいけないというふうなこともあります。

幹事社： わかりました。お聞きしていると、市としてはまだ積極的に取り組まれていないように聞こえるんですが、まだそこまで踏み出してはいないということ。

市長： そんなことはなくて、2020年のオリンピック・パラリンピックというのは、インバウンドのお客さんを取り込むという意味では非常に大きなチャンスだと思っていますので、いろいろな面のバランスを考えていかなくてはいけないかなと思っています。施設整備みたいなものがすごく必要になってくるといって、やや現実感というのがどうなんだろうということと、ホテルシップがついて、そこから回遊してもらって、川崎に、いろんなところとこのをどうつくってイけるかということもあるでしょうし、川上から川下まで、やはり一連のものを整えないと、ホテルシップ単体では、何というか、経済効果というか、いろんなものも生まれてこないと思いますので、そういう意味での全体的な取り組みということをやっていかなくてはいけないかなと。ですから、非常に前向きに捉えてはおりますが、そこにはまだクリアしなくてはいけない課題があるので、それを一つ一つ、どうすればどうなるのみたいな話を詰めていかなくてはいけないかなと。

幹事社： ありがとうございます。

《ヘイトスピーチについて》

幹事社： あと、話は変わります。先日、市民団体が、ヘイトスピーチの問題に絡んで市に申し入れをしました。彼らの表現としては、人種差別撤廃条例に関して、刑事罰も含める条項を設けた条例の制定を求めるということがありました。市として、その申し入れに関する受けとめと、刑事罰も含めるような条例というのは作り得るのかどうか、どうお考えになっているのかをお伺いしたい。

市長： いただいた要望については承知しておりますし、しっかりと受けとめたいと思いますけれども、具体的にどんな条例をというふうなのは、まさに今研究段階でありますので、その条例の中身の形については、現時点では特にコメントはございません。

《副市長人事について①》

幹事社： 最後です。来週末、議会の最終日となります。その最終日に合わせて、副市長の同意案を出される流れになっているやに聞いております。現時点でどこの何という方を副市長に推すかというのは、この場で公表していただくことは可能なんでしょうか。

市長： いや、それは15日に議会に提案することになっていますので、それまでお待ちいただければと思います。

幹事社： 提案はするということで、どういった視点、着眼点で副市長を選ぼうと考えていらっしゃるのでしょうか。

市長： それも人を見てからにさせていただけるとありがたいかなと。

幹事社： 人を見ればわかるといったことですか。

市長： そのように思いますね。

幹事社： 幹事社からは以上です。

各社さん、皆さんどうぞ。

《生産性革命について》

記者： 中小企業の生産性向上のための設備投資について、固定資産税を3年間免除されるという方針を、先般、市議会の代表質問の答弁の中でも表明されましたけれども、その後、相模原市と横浜市も同様の措置をとるということを公表されて、昨日でしたか、千葉市も表明しているんですけども、ただ、ほかの自治体については、課税免除で減収になった分の75%は普通交付税で補填がある。ところが、川崎の場合は不交付団体のためにその補填がないので、丸々減収になってしまうわけですが、以前から現在の地方交付税と地方財政制度への不満といいますか、いろいろ表明されていますけれども、今回の件でも、こういう減収分が不交付団体であるがゆえに補填されないという状況について、どうお考えなのかをお聞かせいただけますか。

市長： はい。このことを、実は、国等に対して現在働きかけているなかの例としても挙げて、これは川崎市として今回の3年間全免にしますよというふうな、しかし、今、おっしゃっていただいたように、不交付団体なのでこういうことなんですよ、減収がもろに出てしまうんですというふうな話もさせていただいて、普通交付税の算定だとか、そういったこともしっかりと考えていただきたいという訴えはさせていただいております。

しかし、今回の固定資産税の減免と、ものづくり補助金をはじめとするこういった

中小企業の支援というのは紐づいていますので、これは非常に前向きに捉えて、この機会にぜひ、中小企業の生産性を上げる最大の好機にしたいという意味での政策判断ということになりますので、多少の減収が出てきたとしても、将来的には設備投資を中小企業の皆さんが積極的にしていただくことによって、企業業績の回復だとか、あるいは、さらに収益を上げていただいて、さらに将来的には税収増につなげていきたいと、そういうふうを考えています。

記者： ありがとうございます。

《地方税財政制度について》

記者： 今の質問の続きなんですけれども、地方財政制度で、今回の予算の審査、特別委員会ですか、非常に財政の問題ともなると質問が出てくる、川崎市は1人負けとか、やっぱり厳しい条件の中で……。皆さん、いろいろ意見をおっしゃっていると思うんですけれども、これは市長としては国に強く働きかけていくというようなことで、いろんなことを皆さんおっしゃっていましたが、総務省から幹部が来ていないと。で、国交省から今の港湾局長が来たとかいろいろ聞こえるけども、市長になってから、総務省からの人事が途絶えていると。これは戻すべきじゃないかと。で、いろいろ、地方財政の細かいさじ加減というのはほんとうに水面下の話でわからない部分もあると思うので、正攻法はもちろんやりつつ、そういう部分もやっていく必要もあるのかな、どうなのかなと思いつつながら私は聞いていたんですけれども、答弁があれば検討したいというような、どっちともとれるような答弁だったと思うんですが、改めてその辺のお考えというのをお聞きできればと思うんですけど。

市長： 逆に返せば、もし万が一にでも、総務省の役人が出向していたからということで、算定基準が変わるようなものであっては、これは大変な問題になってしまうと。そんなことはないはずで、そういう意味での適材適所とか、人事交流することによって、国が持っている知見というものを活用していくということなら大事だというふうには思っていますが、総務省の人事交流がないからといって、地方財政制度に何か影響しているというふうな見方は全くしていないし、総務省に聞いても、まさかそんなことがあるはずもないことだと思いますので、そこはやっぱり、しっかりと制度と、今の川崎市が置かれている現状とを、ちゃんと説明していくことが大事かなと思っています。不交付団体の東京都と川崎市は全然違うんだという、そのことをちゃんと伝えていかなくちやいけないなと思っています。

記者： そうですね、まあ、質問者も、そういう意図では、もちろん、やりとり聞いて

ても言ってなかったんですけど、ちょっと私の想像もつけ加えて話したので、申しわけない。

市長： ああ、なるほど。

《子ども・子育て支援法の改正審議について》

記者： それと別件でもう1件なんですけれども、来週ですか、子ども・子育てか何かの法改正の国会審議か何かで、市長か局長か何かが国会に呼ばれて、自治体を代表して何か意見を言うような機会があるやに聞いたんですけれども。

市長： よくご存じですね。打診があったということは承知していますが、国会日程も流動化していますし、私たちも議会中ですので、ちょっと、どうなるかというのは。

記者： それは、どういう話で来ている話なんですか。

市長： 不正確なことを言うてはいけませんので、担当局からご説明させていただきます。

記者： 特に、日程が合えば市長が行かれるということですか。

市長： もし時間があって、そういう機会があるのであれば、しっかりとお伝えしたいと思っています。

記者： わかりました。

《ホームドアの設置について》

記者： 先週だったでしょうか、JR東日本が、いわゆる首都圏の中でも東京に近いエリアの駅について、期限を区切ってホームドアを全駅に設置するという方針を明らかにしました。この件に関する市長のご所感と、特に川崎市内の駅でスピード感を持ってやっていただきたい駅など、幾つか、ありましたら教えてください。

市長： JR東日本さんで、今回期限を切って対象駅を拡大してということは、私どもが要望してきたことに一定の成果が出てきているということで、大変喜ばしいことだというふうに思っていますが、JRさんに私どもがお願いしているのは、武蔵小杉駅をはじめ、まあ、特に武蔵小杉駅ということを出して、早くということをお伝えしていますので、いろいろ優先順位とかはあるでしょうけれども、その中でも川崎市としては、ぜひ武蔵小杉のホームドアを早急にということを、これからもしっかりと伝えていきたいというふうに思っています。

記者： 東急電鉄さんは既に全線においてホームドアを設置するというので発表済みですけれども、ほかの鉄道会社に関して、JRなどの動きも出てきたということで、

改めてホームドアの早期の設置を呼びかけるといったようなことはお考えなんですか。

市長： そうですね、このホームドアの話というのは、ことあるごとに言っているというか、9都県市でもそうですし、本市独自でも要望していたりしますので、機会あるごとにこれからも引き続いてしっかりとお伝えしていきたいと思っています。

《平成30年第1回定例会の審議について》

記者： すみません、最後にもう1点だけ。

議会はまだ閉会していませんけれども、今回は予算議会ということで、特別委員会、あと代表質問でも、予算についていろいろな質疑があったかと思います。閉会はしていませんが、これまでの審議を振り返って市長としてどのようなご所感をお持ちかということと、あと、一部の会派などでかなり質問時間を余らせた形、会派によっては50分以上余った形で質問が終わっているようなところもあったやに聞いています。予算の審議というのは、これは自治体のあらゆる審議の中でも、決めごとの中でも非常に重要性の高い、一番と言ってもいいほど重要性が高いもので、予算を審議する議会というのはほんとうに1年の議会の中で最も重要な議会ではないかとも思うのですが、若干低調な審議に終わったようにも見える今回の議会について、どのようなご所感をお持ちなのか教えてください。

市長： いや、私の感覚から言うと、全く低調ではないというふうに思っています。議会の審議についてはむしろ量より質みたいなお部分はあるんじゃないかと思ったり、川崎市の議会ってものすごく長いんですよ。多分、全国一長いんじゃないですかねというぐらい、質問、各議員が全員30分ずつやるなんていうところ、それも毎議会やるって、僕は聞いたことがないので、そういう意味では地方議会の中では最も多いし、逆に、私たち行政側としてもすごく大変なので、言い方に気をつけないと大変なんですけど、もう少し時間をコンパクトにしてもらえないかなと思うぐらいです。ですから、むしろ時間よりも内容の質のところだと思うので、議論がかみ合っているのか、かみ合うというか、いい議論をすることによってそれが市民生活にとって、どう改善していくのかという議論がちゃんとできるということが大事なので、全く低調ではないなという、むしろ大変だよという感じはあります。

記者： むしろ今までのほうが、ちょっと質問時間が長過ぎるのではないかという。

市長： 長過ぎるというのも、こう言ったら議会に怒られる、怒ると思いますから、あまり言いたくないんですけど、だけど相当ですよ。こんなにやってる議会ってない

と思うし、みんな聞いてますけど、大変ですよ、私たち。

記者： わかりました。ありがとうございます。

《武蔵小杉駅への相鉄線の乗り入れについて》

記者： すみません。議会でもちょっと話が出ていたんですけれども、武蔵小杉駅、相鉄線の乗り入れでさらにちょっと混雑が予想されると思うんですけれども、そのさらなる混雑について、市長の所感をちょっと教えてもらってもよろしいですか。

市長： いや、これはちょっと、どう影響するかというのがまだ示されていないということなので、そのことを見守りたいなというか、情報収集もそうですけど、具体的に実際どうなるのかというのは注意深く見守っていきたいと思いますし、さらに混雑度が増してくるということになると、さらにいろんな面で深刻なところが出てきますので、そこはしっかり見立てと、実際にどうなるのかというのを踏まえた上でコメントさせていただきたいと思っています。

記者： 昨日、まちづくりの局長さんも、東急線ではラッシュ時の1時間に4本増えたりみたいなことをおっしゃっていたと思うんですけれども、その中で、これから、実際に運用が始まってから見守っていききたいというような認識ですかね。

市長： いや、まだ、何というんですかね、私どもが予測するって非常に困難というか、鉄道事業者としてどういうふうな組み立てだとかがそれぞれにあるんでしょうから、その影響がまだ見通せていないということですから、何もない中で、多分そうだろうという推測のもとに発言するのはちょっと控えたいと思います。

記者： ありがとうございます。

《副市長人事について②》

記者： すみません、幹事社さんの質問の副市長の関係で、出してからということなんですけど、三浦さんが一応、3月いっぱいという話で、市側から議会サイドには一応そういう打診ということはあるようには聞いてるんですけれども、その部分で言うと、次は副市長全員、福田さんになってから就任された方に切りかわるのかななんて思ったんですけれども、ちょっとコメントできないですかね。

市長： 事実、三浦さんの任期は満了になるということだけは事実ですけど、それ以上のことは、はい。

記者： わかりました。

司会： ほかにございますでしょうか。

よろしいでしょうか。それでは、以上をもちまして終了いたします。

市長： ありがとうございました。

(以上)

この記録は、重複した言葉づかい、明らかな言い直しや質問項目などを整理したうえで掲載しています。

(お問い合わせ) 川崎市役所総務企画局シティプロモーション推進室報道担当

電話番号：044(200)2355